○爺子押沢

荒川鉱山の奥地、いわゆる牛沢又国有林地帯には、蘭冠山とか奥山（七五一メートル）とかいう高い山々が連なつている。

昔、この沢奥に入つて炭を焼く親子がいた。ある年の冬、山小屋に泊つて炭焼を続けていたところ、近来稀なる猛吹雪が襲い、連日連夜仕事もできない程吹きまくり、数日たつても吹きやまなかつたため、貯えてあつた食糧も尽き、家に帰るにも吹雪と丈をこす積雪で容易でなく、あれやこれやと考えていたところ、運よくその日の午後より雪も小降りとなつて来たので、父は決心し息子を小屋において家に食料を取りに帰ることにした。

息子は、その話を聞いて、沢奥の小屋に一人おるのがつらく、父と同行するといつてきかなかつたが、父は一人の方が早く行動できると思い、色々なだめ息子に大斧を渡し、「狐でも狸でもでてきたら、これで殺してしまえ、たとえおれの姿をした者がきても、狐や狸が化けたのかも知れぬから、よく注意して見て少しでも変だつたら斬つてしまえ」といい残して家に向つた。積雪は余りにも多く谷を埋め山の形をかえ、歩くたびに腰までも没する程で、歩くというより泳ぐといつた方がよいくらいであつた。いくらも進まぬうち小降であつた雪はまた勢を盛り返し、加えて夕暮がひたひたと山々を覆い始めた。父はとうとう家に帰ることを断念し、今きた道を山小屋へとひき返した。

一方山小屋に残つた息子は、昼の間はさほど恐ろしくもなかつたが、夕闇がせまるとひしひしと寂寥感を覚え、やがてそれが恐怖心にかわり、布団をひきずり出すと、斧をいだいて布団にもぐり込んでぶるぶるふるえているのであつた。聞くまいとする程鮮かに外の物音が耳にせまつてくる。だがそんな不気味な音を聞いている内にうとうとしたらしく、突然ドンドン、ドンドンと小屋の戸を叩く音にガバとはね起きた。「おう、今帰つてきた、とても吹雪がひどくてあきらめてきた。さあ戸をあけてくれ、明日は二人で帰ることにしよう」と父の声、始は父が帰つて来たと、ホット安堵したが、すぐ「狐や狸がおれに化けてくるかも知れぬから注意してみれ」といつた父の言葉が思いだされると、背筋に水をかけられたようにゾーツとし、斧をつかみなおすや戸をガラリとあけた。父は吹雪とともに疲れてフラリと入つて来た。息子は今だとばかり手にした斧を振りあげ、頭をめがけて打ちおろした。父はアッと声をあげ「こらおれだ、おれだ助けてくれ」と声をかぎりに叫んで逃げ廻つたが、半狂乱となつた息子には役だたなかつた。父はとうとう息子の手にかかつて血まみれになつて死んでいつた。息子はまんじりともせず夜をあかしたが、死んだ父の姿はいつまでたつても狐にも狸にもならなかつたという。

このことがあつてから、この沢を「ててころし沢」といつていたが、いつからか「ててこおし沢」となつたという。（荒　川）